

# 史跡旧二条離宮 (二条城) ・ 平安宮神祇官 ・ 平安京冷然院跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 二

二  
二  
二

史跡旧二条離宮 (二条城) ・ 平安宮神祇官 ・ 平安京冷然院跡

財団法人  
京都市埋蔵文化財研究所

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡旧二条離宮 (二条城) ・  
平安宮神祇官 ・ 平安京冷然院跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび公共下水道埋設工事に伴います史跡旧二条離宮（二条城）の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

平成14年10月

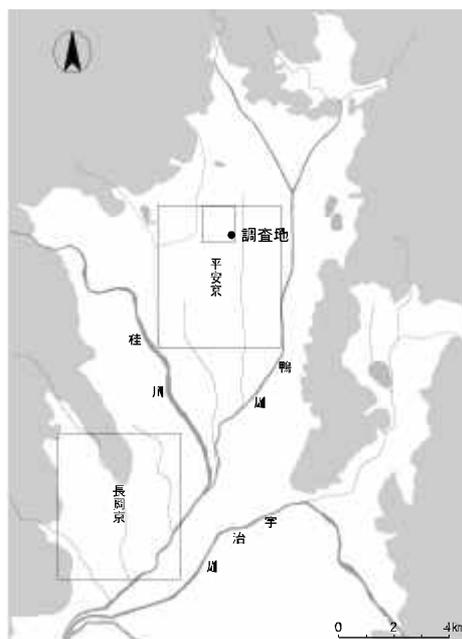
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 史跡旧二条離宮（二条城）・平安宮神祇官・平安京冷然院跡
- 2 調査地点所在地 京都市中京区竹屋町通堀川西入二条城町
- 3 委託者及び承諾者 京都市 代表者 京都市長 梶本頼兼
- 4 調査期間 2002年7月3日～2002年9月18日
- 5 調査面積 約120m<sup>2</sup>
- 6 調査担当職員 大立目 一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「聚楽廻」「壬生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 調査区ごとに通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 挿図・図版の土器類・瓦類の順に通し番号付けた。
- 13 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 14 作成担当職員 大立目 一

（調査地点図）



# 目 次

1 . 調査経過	1
2 . 遺跡の位置と環境	2
( 1 ) 位置と環境	2
( 2 ) 周辺の調査	2
3 . 遺 構	3
( 1 ) A 区の遺構	3
( 2 ) B 区の遺構	8
4 . 遺 物	11
( 1 ) 遺物の概要	11
( 2 ) A 区の土器類	12
( 3 ) B 区の土器類	14
( 4 ) A 区の瓦類	15
( 5 ) B 区の瓦類	17
5 . ま と め	19

# 図 版 目 次

図版 1	遺構	1	A 区第 2 面全景 (西から)
		2	A 区第 3 面全景 (東から)
図版 2	遺構	1	A 区第 4 ・ 5 面全景 (東から)
		2	A 区第 6 面全景 (西から)
		3	A 区第 6 面 P 93 ・ P 90 ・ SX89 (北西から)
図版 3	遺構	1	B 区第 2 面全景 (西から)
		2	B 区第 2 面 SE23 (西から)
		3	B 区第 2 面 SD25 (北から)
図版 4	遺物		B 区 SD25 出土土器
図版 5	遺物		A ・ B 区 出土 軒瓦

## 挿 図 目 次

図 1	調査区周辺地図 ( 1 : 5,000 )	1
図 2	調査前全景 ( 南東から )	2
図 3	A 区調査状況	2
図 4	A 区第 2 面遺構平面図 ( 1 : 100 )	3
図 5	A 区第 3 面遺構平面図 ( 1 : 100 )	4
図 6	A 区第 4 ・ 5 面遺構平面図 ( 1 : 50 )	5
図 7	A 区第 6 面遺構平面図 ( 1 : 50 )	6
図 8	A 区北壁 ・ 西壁断面図 ( 1 : 50 )	7
図 9	B 区第 2 面遺構平面図 ( 1 : 50 )	9
図 10	B 区南壁SD25断面図 ( 1 : 50 )	9
図 11	B 区北壁 ・ 東壁断面図 ( 1 : 50 )	10
図 12	A 区SX68 ・ SX89出土土器 ( 1 : 4 )	12
図 13	A 区 P 88 ・ P 54 ・ 黒褐色整地層出土土器 ( 1 : 4 )	13
図 14	A 区SK58出土土器 ( 1 : 4 )	13
図 15	A 区SK50出土土器 ( 1 : 4 )	14
図 16	B 区SE23出土土器 ( 1 : 4 )	14
図 17	B 区SD25出土土器 ( 1 : 4 )	15
図 18	A ・ B 区出土軒瓦 ( 1 : 4 )	16
図 19	B 区出土軒瓦 ( 1 : 4 )	18

## 表 目 次

表 1	遺構概要表	11
表 2	遺物概要表	18

# 史跡旧二条離宮 (二条城)・平安宮神祇官・平安京冷然院跡

## 1. 調査経過

京都市下水道局による公共下水道埋設工事の計画が持ち上がり、発掘調査を実施する運びとなった。調査対象地域は二条城の北側で、竹屋町通（松屋町通から美福通間）の歩道を含めた南側である。調査区は東西2箇所を設定した。2箇所とも史跡旧二条離宮（二条城）内にあり、また、西地区（B区）は平安宮内の神祇官跡、東地区（A区）は平安京左京二条二坊三町、冷然院跡の北西部に該当する場所である。

発掘調査は2002年7月3日より準備作業を行い、11日からA区の発掘作業を開始する運びとなった。掘削面積は南北4.2m、東西9.0mの約38㎡。史跡旧二条離宮の地域にあたるために、江戸時代と冷然院に関連する平安時代の遺構等を主眼に、文化庁の指導を仰ぎながら調査を進める事となった。A区の調査は史跡であるため近現代の路面検出から行い、順次、江戸時代（路面・側

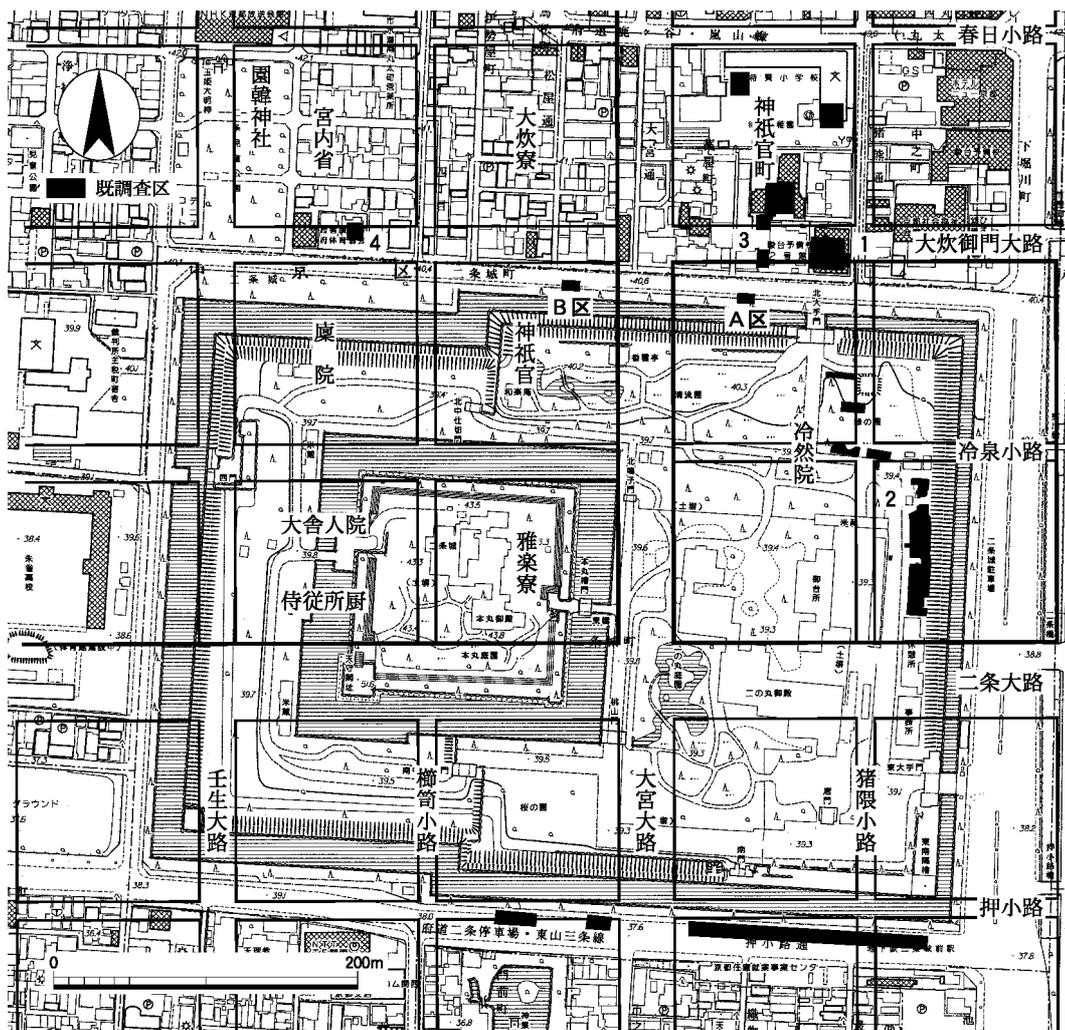


図1 調査位置図 (1 : 5,000)

溝)、室町時代(土取り)、冷然院関連の平安時代後期から平安時代前期(柱穴・溝)と調査を進めた。その結果、多くの遺構を検出するに至った。この間、これらの遺構は文化庁より記録保存にとどめる事で了解を得て調査を進めた。A区の調査は8月23日に終了した。

B区の調査は8月28日から掘削を開始した。掘削面積は南北4.2m、東西9.0mの約38㎡。B区も史跡旧二条離宮にあたるため、江戸時代の遺構等に関してはA区同様に文化庁の指導を仰ぎながらの調査となったが、すでにA区で江戸時代の路面等の記録は得られているために、文化庁の了解を得て、下層の江戸時代前期の路面基礎土層(桃山時代直上面)の面まで重機で掘削する事になった。遺構は桃山時代の溝・堀状遺構、鎌倉時代の井戸が主な遺構となった。B区の調査は9月18日をもって終了した。

## 2. 遺跡の位置と環境

### (1) 位置と環境

調査地は二条城の北側で、史跡旧二条離宮(二条城)にあたる。二条城は、徳川家康が征夷大将軍宣下の際築いた城で、1994年に世界遺産に登録されている。東地区(A区)は平安京左京二条二坊三町、冷然院跡の北西部に該当する場所で、北辺部の建物や庭園関係の遺構の検出が期待された。西地区(B区)は平安宮内の神祇官跡に想定される場所である。

### (2) 周辺の調査

東地区(A区)付近では、複数の発掘調査が行われている。1982年度の発掘調査<sup>1)</sup>(図1-1)においては、築地の痕跡は検出できなかったが、大炊御門大路路面および南側溝、冷然院北限築地の内側溝を検出している。2001年度の二条城内北東隅の発掘調査<sup>2)</sup>(図1-2)においては、冷然院関連の平安時代前期から後期に至る景石群を伴う池状遺構を検出し、大きな成果が得られた。また1982年度調査区の西隣における1994年の他団体の調査<sup>3)</sup>(図1-3)でも大炊御門大路南北側溝、それに伴う築地内側溝を検出している。



図2 調査前全景(南東から)



図3 A区調査状況

西地区（B区）は平安宮内の神祇官跡にあたり、2001年には北西の平安宮宮内省において発掘調査<sup>4)</sup>（図1-4）が行われ、桃山時代の溝、平安時代の土壌・溝などを検出している。

このように両地区とも、当該地域の歴史変遷を追求する上で重要な発掘調査が実施されており、今回の調査も同様に建物関係等の遺構検出が期待された。

### 3. 遺 構

調査区は2箇所に分かれているため、各調査区ごとに遺構の概要を述べる。なお、各検出遺構および出土遺物の時期の判定は、平安京・京都<sup>5)</sup>～戢期の編年案に準拠する。

#### (1) A区の遺構

A区の調査は、史跡旧二条離宮にあたるため、第1面の路面1（大正・昭和）から調査を開始した。ここでは路面1の記述を省き、下層の江戸時代にかかる路面遺構から平安時代へと順に概述する。

現地表面の標高は40.60mで、基本土層は地表面より-36cmがアスファルトと盛土を含む現代層、-36～42cmが昭和以降の竹屋町通旧路面1構成層、-42～58cmが江戸時代後期から明治時代以降にかけての路面2構成層、-58～70cmが江戸時代前半期から後半期の路面3構成層となる。路面3構成層の直下から-76cmは平安時代後期の叩き締められた黒褐色砂泥整地層、最終面は平安時代前期の遺構を検出した無遺物層（地山）の暗褐色砂泥層となる。各土層の堆積状態は、平安時代後期の面まで東西にほぼ水平を成すものであった。

#### 第2面（江戸時代後期から明治・大正時代）

近世遺構として路面2を調査区全体で検出している。江戸時代後半期から明治時代にわたる道路敷であるが、北壁断面の観察から幾度かの修築を施された部分も見られ、大正時代まで活用された可能性は遺物の混入具合からも十分に考えられる。また、路面に伴い南側に東西側溝SD8、溝の南肩口に東西柵（P9・18・7・19・13）等を検出した。

路面の状態は、粗砂と径2cm以上の礫を多量に含み厚さ10cm弱程に固められ、その下層に小礫を多分に含んだ砂礫層を積土としている。路面直上には薄く白砂が敷かれ、かなり整備された路面であった事が理解できる。

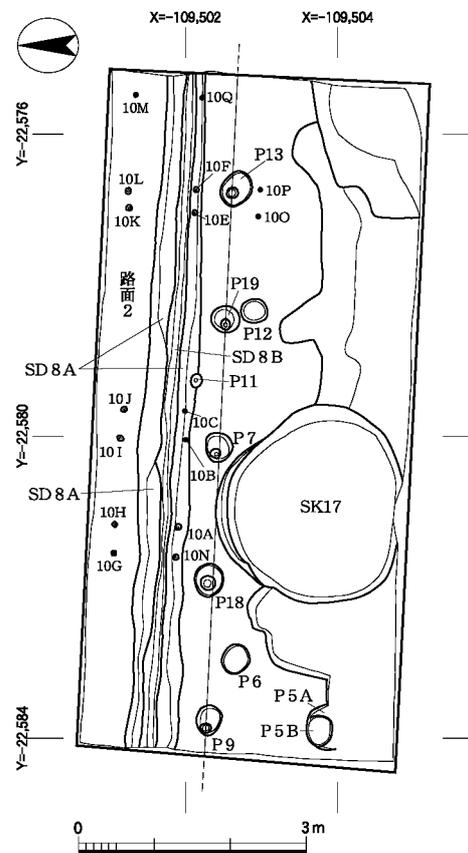


図4 A区第2面遺構平面図（1：100）

SD 8 Aは2段落ちの形態を持ち、上部は幅70cm、深さ10cm。中央凹部のSD 8 Bは上端面から20cmの深さを測る。中央部の凹部には全体に拳大弱の石が多く含まれており、暗渠的な機能を呈するものであったと考えられる。並行する東西柵のPitは径40cm弱、深さ40cmの円形を呈し、東西に180cmの等間隔で均一に5基が並ぶ。また、溝を横切る小規模な小橋の柱跡（10A～Q）も4箇所検出している。

近隣の古老から聞いた話によると、この辺りは番屋町と呼ばれ馬を繋ぎ止めておく柱（埒）がたくさん東西に並んでいたらしいという。そのことから溝以北を道路面として利用し、以南を馬場などに利用し、二条城域と道路を区画する柵があったと思われる。これらの事から、この時期の道路は現在の旧竹屋町通より南端が北にあり道幅が狭かったと推定できる。また、この路面の機能していた時期は、前述したように幾度か修築された可能性も高く、遺物は江戸時代後半期に混じり近現代のものも多く混入している事から、大正時代まで活用されていたと考えられる。

### 第3面（江戸時代前期から後期）

江戸時代前期に構築されたと想定される道路敷である路面3、路面に伴い南側に東西の側溝SD 8 Cと東西柵（P 14・15・11・16・20）を第2面と同様に検出した。

路面3も上面を厚さ10cm弱の細かい白砂層で覆い、下層に厚さ10cmの砂礫層を積土にしているが、白砂層は路面2よりも厚く、より細かな砂質を持ち密であった。路面の窪みなどの修築も路面2と同様に見られるが、大きな修築は成されずに、構築後かなりの期間利用していたと思われる。

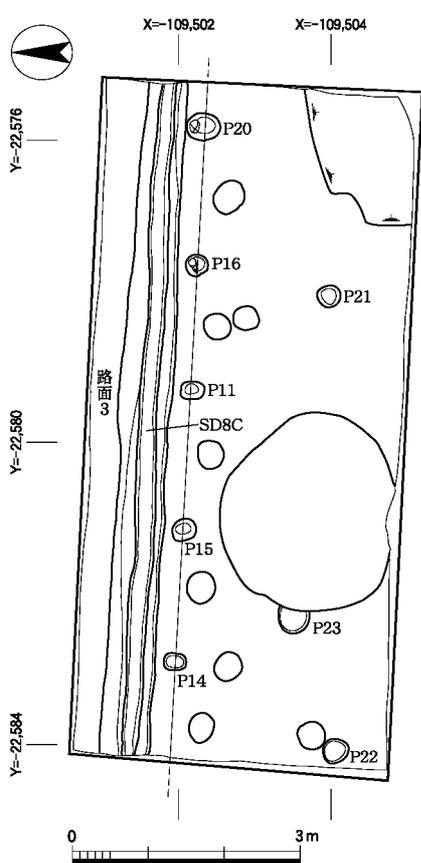


図5 A区第3面遺構平面図（1：100）

る。

SD 8 Cは第2面のSD 8と同様、2段落ちで凹部には石を含む暗渠を持つものであった。溝の中心がSD 8より北に20cmの位置にある。溝幅70cm弱、深さ15cm、中央部の凹みは上端面から20cmの規模であった。並行する東西柵のPitは径30cm弱、深さ40cmの円形を呈し、路面2と同じく180cmの等間隔をもって東西に均一に5基が並び、ほぼ路面3を路面2が踏襲している事がわかった。

この道路敷は、寛永三年（1626）後水尾天皇の行幸を二条城に迎えるために行われた、寛永元年（1624）二月、将軍徳川家光による二条城大改修期<sup>6)</sup>に伴うものである可能性が高い。

また、この路面構築層の基底には路面状を呈する面が見られ、江戸時代初期の路面を想定していたが、無作為に撒かれた礫の状態などから路面構築層の基底を成す礫層と考えた。また、その基底部分で東西溝SD 27を検出した。調査区の東端から西へ延び西端付近で

立ち上がる。上層SD 8の溝の中心から南に50cmの位置にある。形態はSD 8と同じ2段落ちである。規模は幅60cm、深さ4cm、中央部の凹みは上端面からの深さ10cm弱であった。非常に浅く上部を削平された様子が見られるため、大改修時により削平された江戸時代初期の溝であった可能性もあるが、遺物も細片であるため確証は得られない。

第4面（室町時代後期）

寛永期の路面構築層を掘削した後、直下の調査区東北隅でSK50を検出した。北肩は調査区外にあり検出してないが、遺構の形態は方形に近く、東にも広がる様相を見せる。規模は現存で東西幅300cm、南北幅300cm以上、深さ55cmを測る。平安時代前期・後期から鎌倉時代、室町時代後半期の遺物を多く包含するが遺物の下限年代から聚楽第および二条城等が成立する室町時代後期には、すでにこの遺構は埋没していた可能性が高い。

第5面（平安時代中期から後期）

中央部から西部一帯には黒褐色砂泥を叩き固めた非常に堅固な整地層を検出した。包含する遺物は平安時代後期から末期の土師器の破碎細片が多く、故意に破碎したものを黒褐色砂泥に混入し整地に利用したものと推定できる。この面から冷然院に関連する整地面と想定し遺構の検出を進め

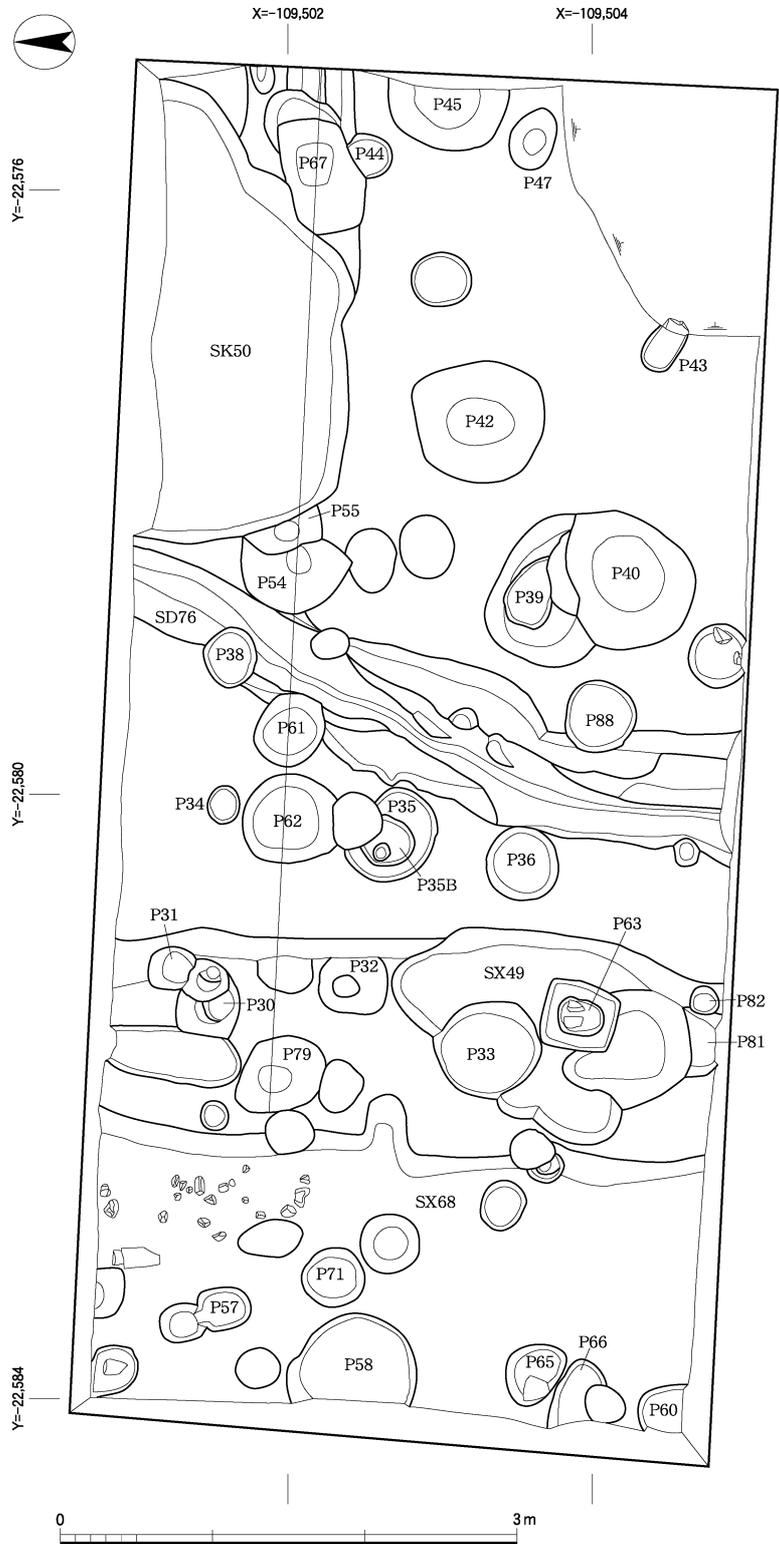


図6 A区第4・5面遺構平面図（1：50）

た。この整地層を掘削後、西部に暗褐色砂泥面を肩として西に落ち込む整地層SX68を検出した。上層に炭を混入する埋土が堆積し、平安時代初頭期・前期から後期（9世紀初頭～11世紀後半）の遺物を包含する。下層には後期の遺物も比較的多く混入するため、後期に埋めて整地されたと推定される。

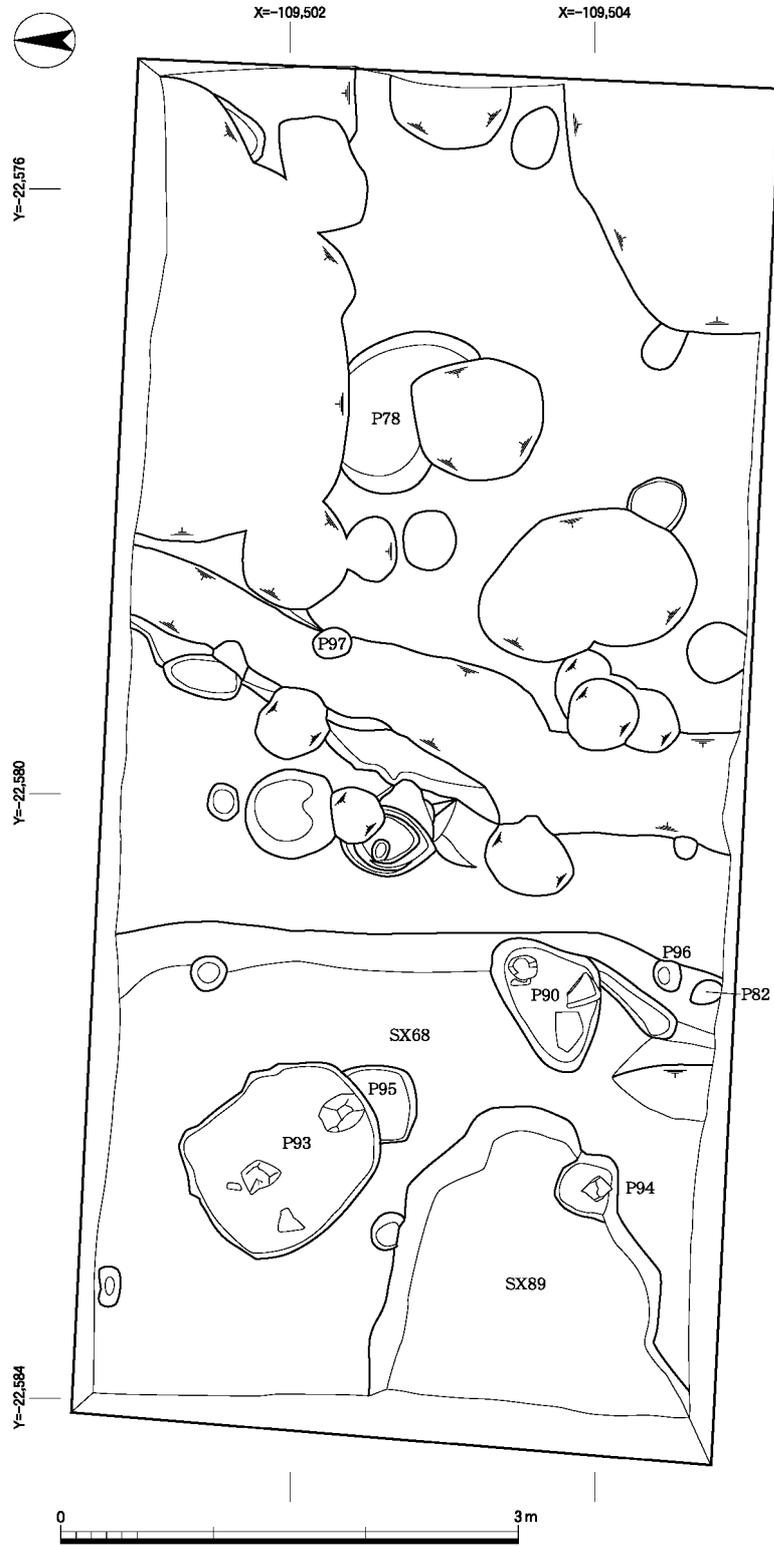


図7 A区第6面遺構平面図(1:50)

SX68の検出面と以東の暗褐色砂泥面より平安時代後期（11世紀後半～12世紀前半）のPit、溝等を検出している。建物等の関連に推定されるものとしては中央部北寄りで東西柱穴列（P79・62・54・67）を検出している。柱間はP79・62・54は170cmの等間隔である。形態は径50～60cmの円形を呈する。P54以外は検出面から深さ10～20cmの浅いものであり、P54に限り深さ40cmで柱痕跡らしきものが見受けられた。これらのPitから主に平安時代後期の土師器が出土している。またP67は形態が方形を呈し、P54との柱間が270cmと広いので別の建物等の可能性がある。またこれも非常に浅いもので柱跡の痕跡は検出できなかった。遺物も時期が少し下がり平安時代末期（12世紀後半）の遺物を包含する。

その他に柱穴として捉えられるものとしてP54と南北に並ぶP39・40がある。P40がP39より新しく、

P 39は平安時代初頭から前期の遺物を混入し、後期の遺物を多く包含している。P 40は平安時代後期から末期の遺物を包含しているものである。形態はP 40が80cmの円形を呈し、深さ40cmを測る。P 39も同じ形態を持ち、深さは20cmと浅い。どちらも柱痕跡は見られなかった。それ以外にもPitはあるが建物等の関連としての並びは、はっきり捉えられていない。

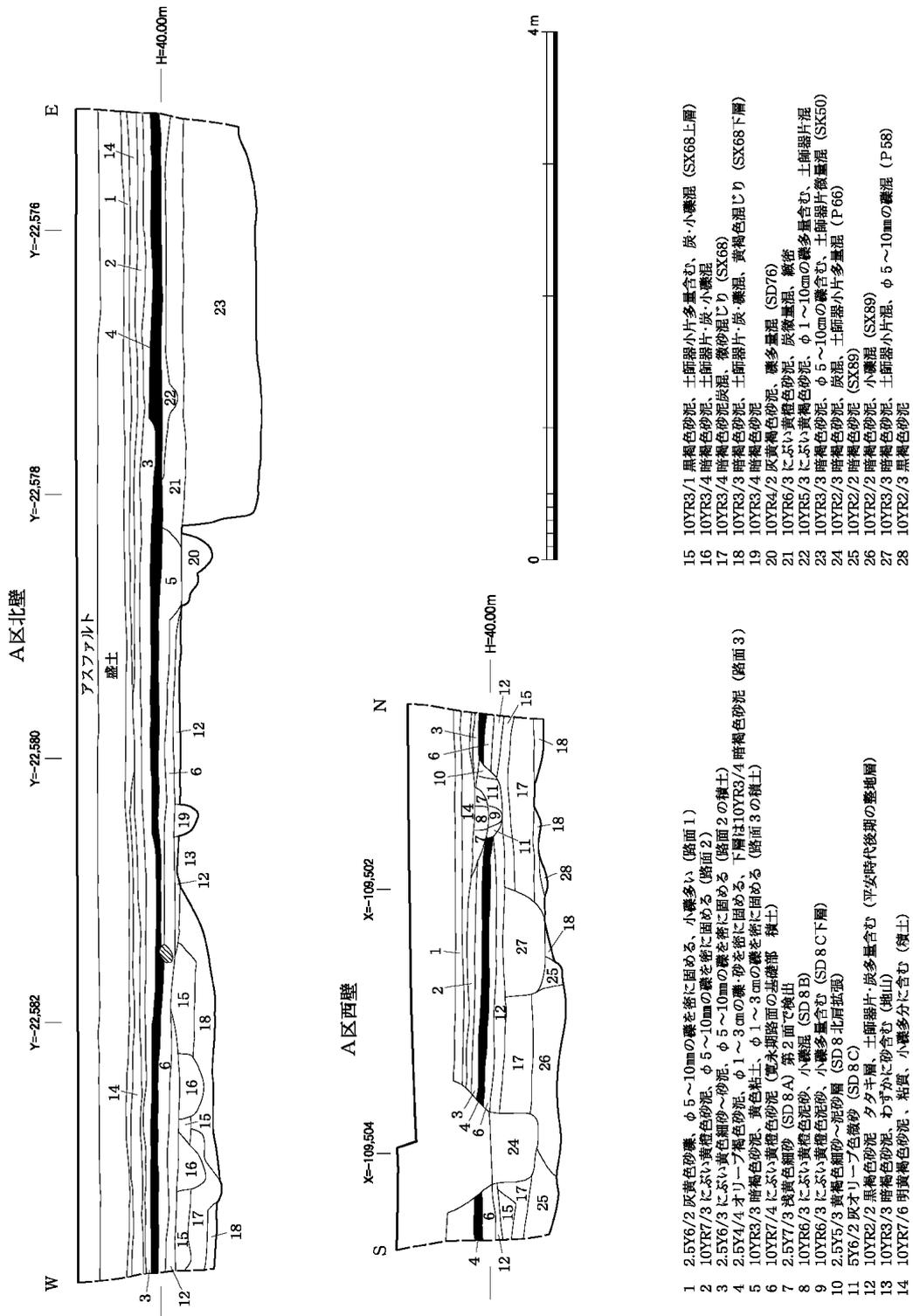


図 8 A区北壁・西壁断面図(1:50)

南北溝SD76を中央部で検出している。溝の中央部付近から東に湾曲する溝である。埋土は拳大の礫を多分に混入した砂礫層で、規模は幅60～80cm、深さ30cm。変則的に2段落ち状になり、不規則な溝形態をもつ自然流路である。遺物は平安時代後期の遺物を包含していた。混入遺物として弥生土器が出土している。

#### 第6面（平安時代前期）

後期に埋められたSX68を掘削した後、西部においてP90・93・94・95、SX89を検出した。

P90はSX68の西肩口で検出しており、前期の瓦が2個体出土した。P93は隅丸方形の形態をもつ礎石据付遺構の可能性のあるものである。上部は削平された状態であるが、径10～15cmの河原石が2個遺存していたため、礎石据付遺構の基底部と推定している。規模は50cm×60cm、深さは20cmあった。P95はP93より古く、南東に位置する。遺物はどちらも平安時代初頭期のものである。SX89は南部が調査区以西に広がる遺構であるが、西部・南部の広がりを確認できないため遺構の規模・形態等はわからない。P94はSX89より新しい円形の小規模Pitである。遺物は共に平安時代初頭の遺物を包含する。

前述の遺構群や上層のSX68に混じる平安時代初頭の土器群などは、嵯峨天皇が冷然院<sup>7)</sup>に行幸した時期、引仁七年（816）前後のものであるが、調査区の限界から建物関係の復元には至らなかった。

## （2）B区の遺構

B区の調査も同様に史跡旧二条離宮にあたるためA区と同じ段階の調査を踏まえる予定であったが、A区の調査が時間を要した事から、A区で確認済みの近現代から江戸時代の路面は重機で掘削して断面調査のみとし、江戸時代初頭路面構成層の基底部からの調査になった。

現地表面の標高は40.50mで、基本土層は地表面より-35cmがアスファルトと盛土を含む現代層、-35～50cmが大正・昭和初期の竹屋町旧路面1構成層、-50～66cmが江戸時代後期から明治時代にかけての路面2構成層、-66～100cmが江戸時代前半期から後半期の路面3構成層、-100～114cmが江戸時代初頭期の整地層、直下が暗褐色砂泥層の地山となる。各土層はA区同様に水平堆積を示す。

#### 第1面（江戸時代）

第1面のPit群6～15・20～22は全て江戸時代前期から後期のA区の路面3に附随する柵と同様のものである。しかしB区においては柵に共伴する側溝は検出されなかった。

江戸時代前期の路面の下には黄褐色砂礫と共にきめの細かい良質な褐色砂泥が約30cmの厚さで積土として利用されていた。これらはA区同様、寛永期路面構成層の積土であると推定している。

またその直下では粗砂を積み、全体に径3～5cmの礫を含む路面状の整地面を検出した。その面において南部に東西溝SD3を検出している。形態は幅40cm、深さ5cmで西部は攪乱に切られていた。東部も削平されていたが、東壁において断面を検出している。これらは慶長期の整地面に伴う東西溝の可能性はあるが、遺物の出土が微量のため推定の域は出ない。

第2面（桃山時代）

調査区西部において南北溝SD17を路面整地面の直下で検出した。幅120cm、深さ10cmを測る。桃山時代の遺物がわずかに出土している。北壁に当溝の断面を確認している事から北へ延長するものである。

SD17に切られる東西の素掘り堀状遺構SD18の南肩を、北端部全体において検出した。南肩から北側へは急に落ち込み、幅は60

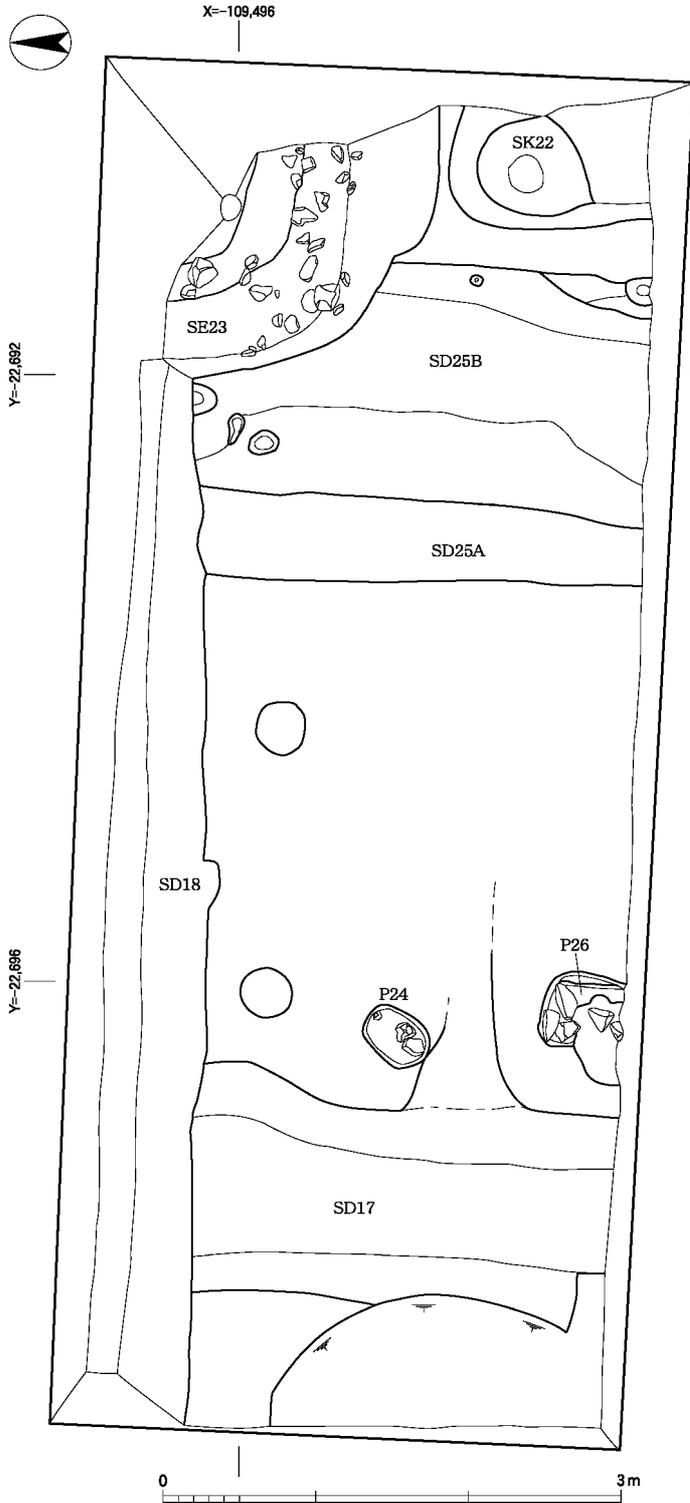
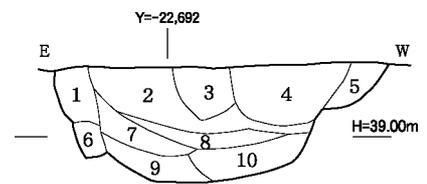


図9 B区第2面遺構平面図（1：50）

cm以上、深さ120cm以上を測る。調査区の限界から北肩は未検出であるが、断面がV字状形の堀状遺構と推定している。桃山時代の土器が出土している。

東部において南北溝SD25A・Bを検出した。形態は幅120cm、深さ70cm。西肩が2段落ちになる溝である。北壁に溝断面が確認できない事から、北には延長せずSD18と合流するものである。出土遺物は、同じく桃山時代（16世紀末）の遺物が多数出土している。

土壙SK22は南東隅で検出した方形形状の土壙である。上記遺構と同時期を成すものであるが、溝との関連はわからない。



- 1 10YR4/5 にぶい黄褐色砂泥（小礫・炭含）
- 2 10YR4/3 暗褐色砂泥（小礫含む）
- 3 10YR3/4 にぶい黄褐色砂泥（小礫含）
- 4 10YR3/4 にぶい黄褐色砂泥（小礫多量含）
- 5 10YR3/5 にぶい黄褐色砂泥
- 6 10YR2/3 黒褐色砂泥
- 7 10YR6/6 明黄褐色砂泥（炭・細礫含）
- 8 2.5YR6/6 明黄褐色粗砂
- 9 10YR2.5 灰黄褐色砂泥（炭含）
- 10 10YR5/2 灰黄褐色微砂（炭含）

図10 B区南壁SD25断面図（1：50）

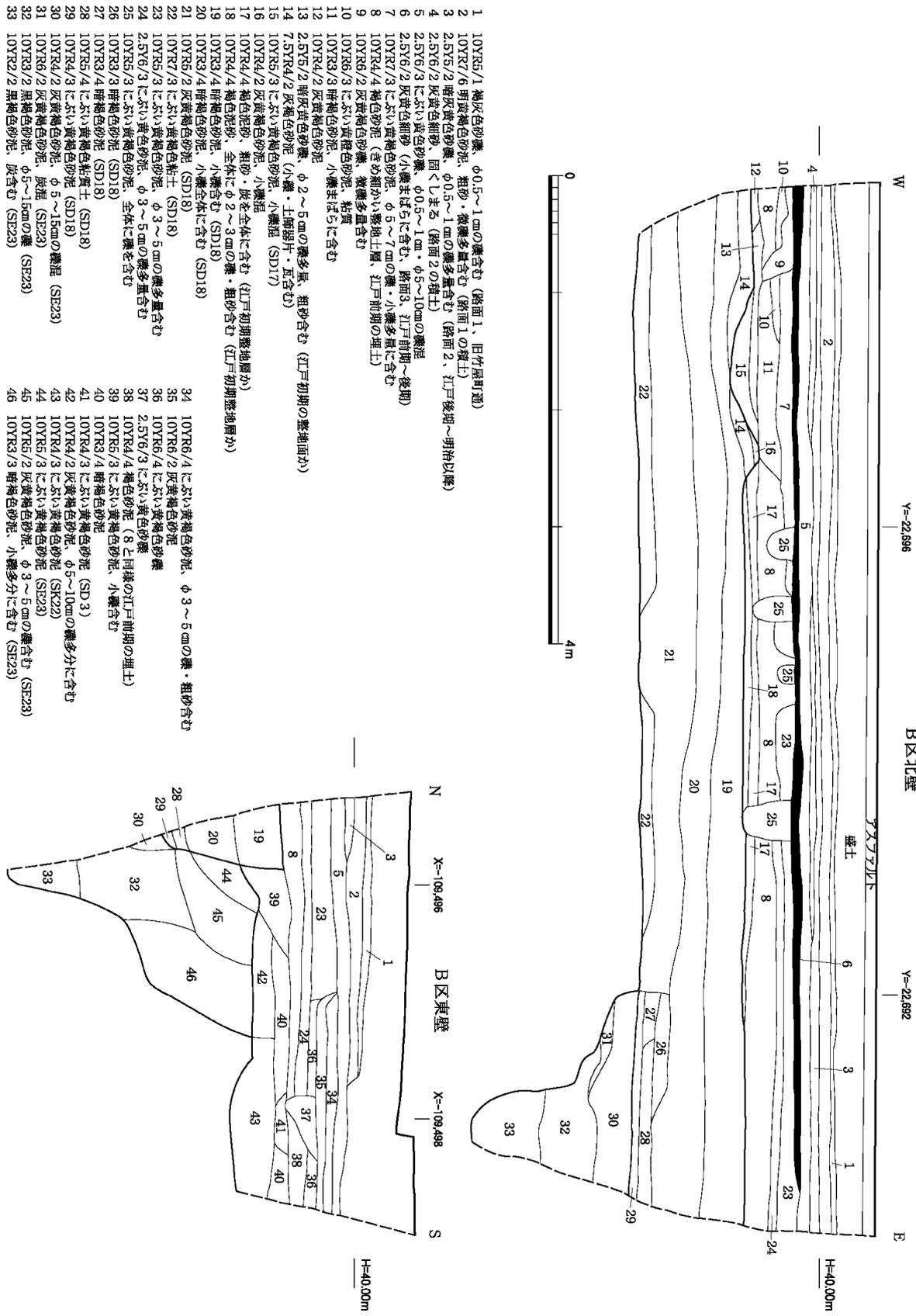


図11 B区北壁・東壁断面図(1:50)

表 1 遺構概要表

時 代		遺 構	
		A 区	B 区
平安時代	I～II期	P90、P93、P94、P95、SX89	
	IV～V期	柱穴列 (P79・62・54・67) P39、P40、P58、SX68、SD76	
鎌倉時代	VI期		SE23
室町時代	IX期	SK50	
桃山時代	XI期古		SD17、SD18、SD25A・B、SK22
江戸時代	XI期中以降	初頭：SD27 前期：SD27、路面3、SD8C、 柵 (P14・15・11・16・20) 後期：路面2、SD8A・B、 柵 (P9・18・7・19・13)	初頭：SD3 前期・後期：柵 (P6～15・20～22)

( 鎌倉時代前半期 )

北東隅において井戸SE23を検出した。掘形が円形の素掘りの井戸で、全体の約3/4が調査区外になるため全様は明らかにできなかった。残存する掘形の一边1.6m、検出面からの深さは2.2m以上、断面形状は掘鉢状の逆凸形である。遺物は鎌倉時代前半期の遺物しか検出していないことから、鎌倉時代前半期に機能し始めてから短い時間帯の中で埋められたと推定している。

この他には鎌倉時代の遺構は検出されていない。

## 4 . 遺 物

### ( 1 ) 遺物の概要

両調査区合わせて平安時代初頭期から江戸時代の遺物を整理箱にして43箱分出土した。遺物の内容は土器、陶磁器、瓦と少量の金属製品 ( 明治時代の半銭、一銭 ) などである。

平安時代初頭から前期 ( 9～10世紀代 ) の遺物はA区のP93、P95、P94、SX89、SX68 ( 混入 ) から出土している。B区においても桃山期の遺構などから混入遺物として前期の遺物が出土している。出土遺物の内容は土師器 ( 椀・杯・皿・甕・高杯 ) 須恵器 ( 椀・杯・皿・甕・鉢・風字硯 ) 黒色土器 ( 椀・甕 ) 緑釉陶器 ( 椀・皿・火舎 ) 灰釉陶器 ( 椀・皿・壺 ) 輸入青磁 ( 壺・椀 ) などである。

平安時代中期から後期 ( 11世紀後半頃～12世紀末期 ) の遺物はA区東西柱穴列 ( P79・62・54・67 ) ・P39・P40・SK58・SD76・SX68・P88・黒褐色整地層などから出土している。出土遺物の内容は土師器 ( 皿・甕・高杯 ) 須恵器 ( 椀・杯・皿・甕・鉢 ) 白色土器 ( 椀・皿・高杯・盤 ) 灰釉系山茶椀 ( 椀 ) 輸入白磁 ( 椀・皿 ) 輸入褐釉 ( 壺 ) 瓦器 ( 椀 ) 瓦 ( 軒丸・軒平

瓦含む)などである。

鎌倉時代前半期(13世紀前半頃～中頃)の遺物はB区のSE23より出土している。出土遺物の内容は土師器である。

室町時代後半期(15世紀後半～16世紀中頃)の遺物はA区のSK50より出土している。出土遺物の内容は土師器(皿・白系・赤系)瓦器(火鉢・鍋・釜)焼締陶器(備前甕・信楽壺・信楽搗鉢)などである。

桃山時代(16世紀末)B区のSD17・SD18・SD25・SK22から出土している。出土遺物の内容は土師器(皿)瓦器(鍋・釜・火鉢)瀬戸・美濃系陶器(灰釉折縁皿・天目茶椀・取柄に転用の天目茶椀)土製品(フイゴ羽口)焼締陶器(信楽・備前)などである。

瓦類は多くがA区において出土している。軒丸瓦が9点と軒平瓦が20点あった。時期は平安時代前期から後期に属するものが大半であり、長岡宮や平城宮からの搬入された瓦の他に讃岐産瓦も出土した。これらの軒瓦は冷然院との関連を窺わせている。

以下に図示した出土遺物について、概述しておく。

## (2) A区の土器類

### 平安時代前期

SX68(図12-1~4)土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、輸入白磁、瓦器、製塩土器、軒平瓦など9世紀前半から11世紀後半の遺物が出土している。ここでは、遺構に伴わないが前期冷然院に関連する遺物として9世紀前半の土器を図示した。1は土師器皿A-である。口径15.0cm、器高1.7cm。調整は外面体部と底部にヘラケズリ調整が施され、口縁端部はわずかにつまみ上げられた形態を持つ。2は北河内周辺産と推定される土師器皿A-である。口径17.0cm、器高1.7cm。調整はオサエとナデで仕上げる。体部は器厚があり、端部も肥厚してつまみ上げられる形態を持つ。3は土師器椀A-である。口径14.0cm、器高3.0cm。調整は外面体部、底部にヘラケズリが施される。4は須恵器の蓋である。平坦な天井部と屈曲する口縁からなり、天井部中央には宝珠形のつまみが付く。内面に墨が付着しており、つまみが欠損した後に硯に転用されたものであろう。土器型式は 期新に属する。

SX89(図12-5)土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦が出土している。5は土師器杯A-である。口径17.0cm、器高4.5cm。調整はオサエとナデで仕上げ、ケズリ手法は見られない。体部は腰部が丸みを持って立ち上がる。全体

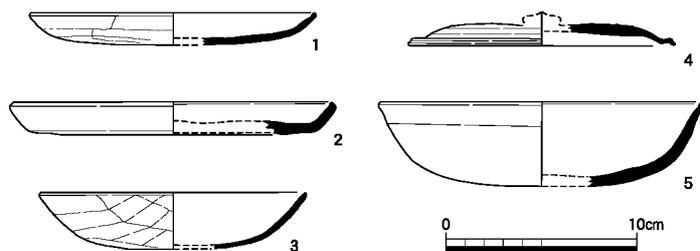


図12 A区SX68・SX89出土土器(1:4)

に器厚があり、端部はつまみ上げられる形態を持つ。土器型式は 期新に属する。

### 平安時代中期から後期

P88(図13-6・7)土師器、須恵器、灰釉陶器、白色土器、輸入

白磁、瓦器が出土している。6は土師器皿Acである。口径9.6cm、器高0.9cm。口縁端部を内へ折り曲げ収めるものである。7は土師器皿Nである。口径14.0cm、器高2.3cm。いずれも調整はオサエとナデが施され、口縁部が外反し体部上端に2段ナデの痕跡が顕著に見られる。土器型式は 期中 新に属する。

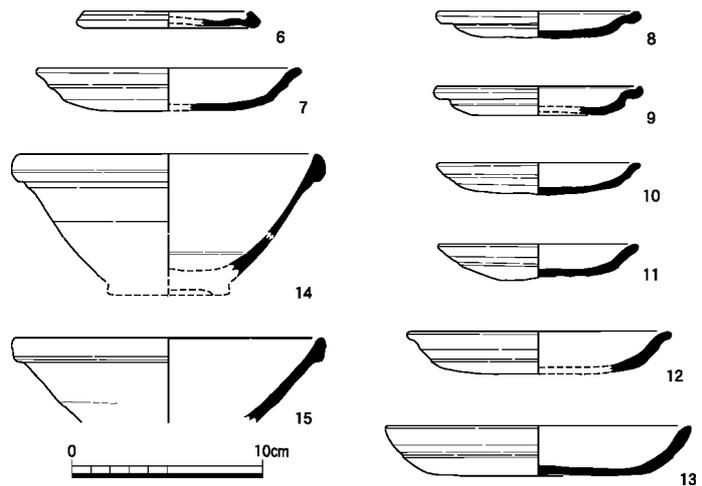


図13 A区P88・P54・黒褐色整地層出土遺物（1：4）

P54（図13 - 8～13）土師器のみが出土している。8・9は土師器

皿Aである。8は口径9.6cm、器高0.9cm。9は口径10.4cm、器高1.4cm。どちらも口縁端部が屈曲し上方に丸く収められるものである。10・11は土師器皿N小である。10は口径10.6cm、器高1.7cm。11は口径10.8cm、器高2.0cm。12・13は土師器皿N大である。12は口径14.0cm、器高2.3cm。13は口径16.0cm、器高2.6cm。いずれも調整はオサエとナデが施され、体部上端に2段ナデの痕跡が顕著に見られる。土器型式は 期中 新に属する。

A区黒褐色整地層（図13 - 14・15）土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入白磁、白色土器、瓦器、焼締陶器などが出土している。整地された該当時期の輸入遺物を図示しておく。14・15は輸入白磁である。口径は16.4cm、玉縁状の口縁端部をもつ。体部は14がわずかに内弯気味に開き、見込には沈線をもつ。15の体部は直線的にやや大きく開く。いずれも体部下位からは露胎である。欠損しているが高台には浅いケズリ出し高台を有するものである。土器型式は 期の幅に属する。

SK58（図14 - 16～19）土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入白磁、瓦器、瓦が出土している。16は土師器皿Nとしているが、胎土と胎色は白色土器と同質のものであり、土師器皿N形式の写しの可能性があるものである。手づくねで成形され、オサエとナデが施される。体部上端には2段ナデの痕跡が見られる。17は白色土器皿である。ロクロナデを施し、底部には回転系切り痕が残存する。18・19は白色土器碗である。同じくロクロナデを施し、底部には回転系切り痕が残存する。土器型式は供伴する土師器片などから 期新～ 期古の時期幅に属する。

#### 室町時代後期

#### SK50（図15 - 20～30）

土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器、白色土器、輸入白磁、輸入青磁、瓦器、山茶碗、施釉陶器（美濃・瀬戸）、焼締陶器（常滑・備前・信楽）など10世紀から15世紀末までの遺物が幅広く出土している。ここでは遺構

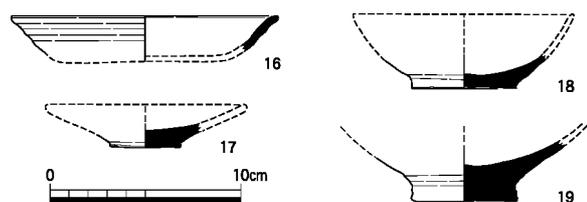


図14 A区SK58出土土器（1：4）

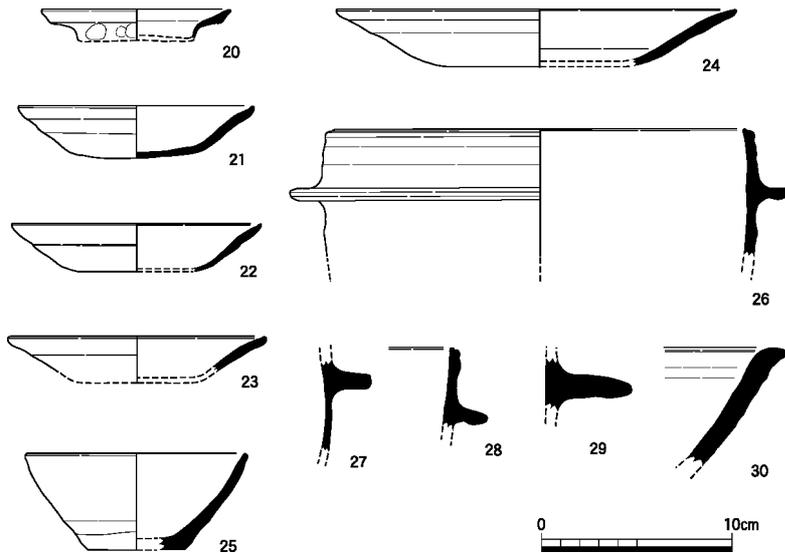


図15 A区SK50出土土器(1:4)

埋没時期に該当する遺物を図示しておいた。20は土師器皿Nである。口径10cm、器高約1.7cm。21~24は土師器皿S大である。21~23は口径12.4~13.8cm、器高2.5~2.8cm。24はより器体がかなり大きくなるもので、口径21cm、器高約3.0cm。いずれも調整はオサエとナデが施される。20は体部下端からきつく外反し、口縁部は

長めの三角形の断面をもち、口縁端部を丸くおさめる。21~24は体部が外反しながら外上方に延び、口縁端部を尖り気味に丸くおさめたものである。25は美濃・瀬戸産の灰釉平椀である。口径11.6cm、器高5.0cm。にぶいオリーブ灰色の施釉を施し、腰部は赤褐色の露胎である。体部は腰部から緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸みのある三角形をもつ。底部は平底で糸切痕跡が残存する。26~29は瓦器羽釜である。30は信楽産の搦鉢で、櫛目はもたないものである。土器型式は室町時代後半の 期中~新に属する。

### (3) B区の土器類

#### 鎌倉時代

SE23(図16-31~35) 土師器、須恵器、灰釉陶器、輸入青磁が出土している。遺構の該当期の遺物は以下である。31~34は土師器皿N小である。口径は8.4~8.8cm、器高1.0~1.5cm。35は皿N大、口径13.0cm、器高2.0cm。調整はいずれもオサエとナデを施す。土器型式は鎌倉時代前半の 期中~新に属する。

#### 桃山時代

SD25(図17-36~45) 土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入白磁、瓦器、焼締陶器、施釉陶器(美濃・瀬戸)などが出土している。遺構の該当期の遺物は以下である。36は土師器皿S大である。口径12.2cm、器高2.1cm。凹みの浅い圈線をもつもので、口縁端部は丸くおさめられる。調整はオサエとナデが施される。37は筒型の脚付き香炉である。口径6.4cm、器高4.8cmで

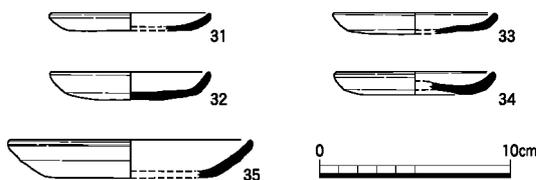


図16 B区SE23出土土器(1:4)

全面にオリーブ灰色釉が施されている。腰部が張り気味に肥厚し、やや外反して立ち上がり、口縁には返り部をもつ。底部外面には輪トチン痕が残存する。38は美濃・瀬戸産の鉄釉小椀である。口径5.6cm、器高2.9cm。腰部中位まで施

釉される。削り出しの浅い高台が付く。39も鉄釉小椀であるが下半は欠損しており、口縁部は垂直に立ち上がり外半する。天目のミニチュアタイプである。40・41も同じく美濃・瀬戸産の天目茶椀である。40は口径10.6cmで高台は欠損している。内面から外面腰部にかけて緑灰色釉が施され、口縁部は垂直気味に立ち上がり外反する。高台際は水平に削られている。41は口径12.0cm、器高5.8cm。内面から外面腰部にかけて鉄釉が施され、口縁部は垂直気味に立ち上がり外反する。高台際は同じく水平に削られ、内反りの削り出し高台をもつ。42・43も同じく美濃・瀬戸産の天目茶椀である。不良品を鑄造道具として使用したと推定される取瓶である。口縁上端部の周縁を鋸歯状に割り落とし加工され、内面と外面上半部には銅滓が多分に付着している。高台際、高台は40・41と同様のものである。44は鉄釉襷皿である。口径10.4cm、器高2.5cm。全面に暗褐色釉が施され、口縁部をヘラで押し当て襷を作る。見込部は周縁に幅広の凹部の輪状面をもち、凹部内周縁に目跡痕が残存する。底部は削り出しの平底で、輪トチン痕が残存する。45は備前産の播鉢である。口径30.4cm、器高13.2cm。胎土は焼き締まった赤褐色を呈する。体部から屈曲する縁帯部が上方に伸び上がり、外面には2本の凸帯が巡る。内面には12本一単位の櫛目を底部、体部中位上方まで施す。

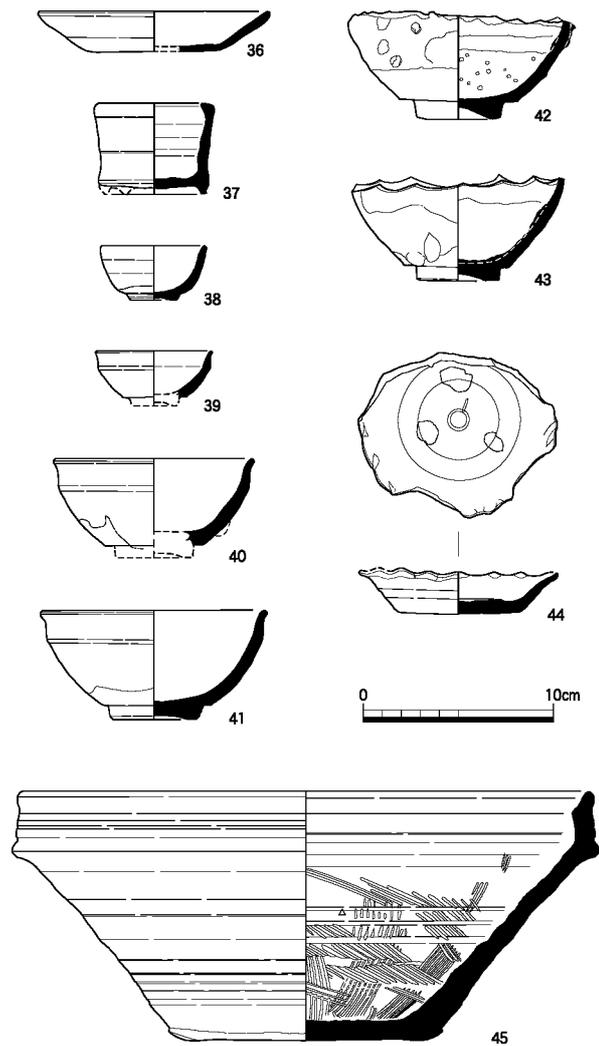


図17 B区SD25出土土器(1:4)

#### (4) A区の瓦類

##### 奈良時代

均整唐草文軒平瓦(49) 平城・長岡京からの搬入瓦である。顎部凸面をヨコナデ、平瓦部凸面タテ縄叩き。瓦当部凹面ヨコケズリ、平瓦部凹面に布目、側面にタテケズリを施す。焼成は良好で硬質。平城宮6664型式<sup>8)</sup>。奈良時代。

##### 平安時代

単弁十六弁蓮華文軒丸瓦(46) 瓦頭部側面上半をタテケズリ後ナデ、下半をヨコナデ。裏面ナデ、丸瓦部凸面タテケズリ、凹面をナデを施す。焼成やや不良で、軟質である。岸部瓦窯産。平

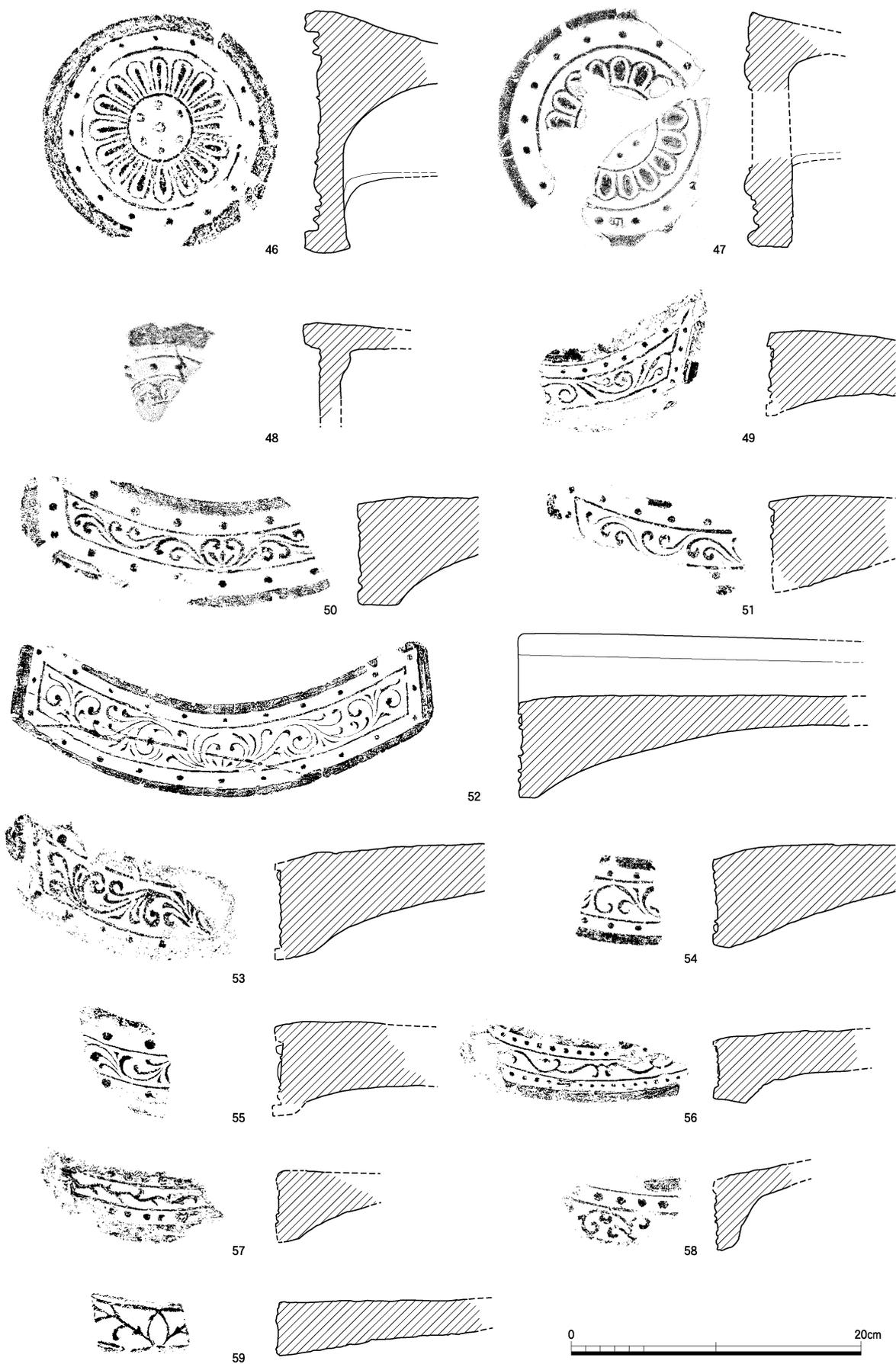


图18 A·B区出土軒瓦(1:4) A区P90:46·50、SX68:47·52~54、SK50:49·55·59、  
B区SD18:48、SE23:51·56~58

安時代前期初頭。

単弁十六弁蓮華文軒丸瓦（47） 瓦当成形は接合式。「近」銘を外区の珠文間に配する。瓦頭部側面上半をタテケズリ、下半をヨコナデ。裏面ナデ、丸瓦部凸面タテケズリを施す。焼成良好で硬質。『木村捷三郎収集瓦図録』<sup>9)</sup>922（深草寺出土）と同文である。平安時代前期初頭。

均整唐草文軒平瓦（50） 51と同文である。顎部凸面をヨコケズリ、平瓦部凸面をタテケズリ。瓦当部凹面ヨコナデ、平瓦部凹面に布目を施す。焼成はあまくて軟質。『平安京古瓦図録』<sup>10)</sup>355と同范で、同様のものが西賀茂角社瓦窯跡、平安宮大極殿、豊楽殿から出土している。平安時代前期。

均整唐草文軒平瓦（52） 瓦当面に水平に范傷が認められる。顎部凸面をヨコナデ、裏面タテケズリ、平瓦部凸面をタテケズリ。瓦当部凹面ヨコケズリ、平瓦部凹面を布目後にヨコケズリ、側面タテケズリを施す。成形が非常に丁寧である。焼成も良好で硬質。広田長三郎編『古瓦図考』<sup>11)</sup>97（西寺出土）と同文。平安時代前期。

均整唐草文軒平瓦（53） 顎部凸面をヨコケズリ、裏面ヨコケズリ後ナデ、平瓦部凸面タテケズリ。一部に縄目叩きが残存する。瓦当部凹面をヨコケズリ、平瓦部凹面は布目、側面にタテケズリを施す。焼成不良で軟質気味。『平安京古瓦図録』325と同文。西賀茂角社産。平安時代前期。

均整唐草文軒平瓦（54） 顎部凸面をヨコケズリ、裏面ナデ、平瓦部凸面ヨコナデ。瓦当部凹面ヨコケズリ、平瓦部凹面ヨコケズリを施す。焼成はややあまく軟質。西賀茂角社産と推定される。平安時代前期。

均整唐草文軒平瓦（55） 顎部凸面をヨコナデ、平瓦部凸面タテケズリ。瓦当部凹面ヨコケズリ、平瓦部凹面布目、側面にタテケズリを施す。焼成はややあまく軟質。西賀茂か栗栖野産と推定される。平安時代前期。

均整唐草文軒平瓦（59） 顎部凸面、平瓦部凸面を縄目叩き。瓦当部凹面、平瓦部凹面に細かい布目を施す。焼成はややあまく軟質。讃岐産。平安時代後期。

## （5）B区の瓦類

平安時代

複弁蓮華文軒丸瓦（48） 瓦当部側面上半タテナデ、裏面ナデ。瓦当部裏面に指圧痕が顕著に残存する。瓦当面の周縁際から内区にかけて斜に范傷が残る。焼成はややあまく、軟質気味である。広田長三郎編『古瓦図考』325（六勝寺出土）と同文。山城産。平安時代後期。

均整唐草文軒平瓦（51） 50と同文である。顎部凸面欠損、平瓦部凸面をタテケズリ。瓦当部凹面ヨコケズリを施す。焼成はややあまくて軟質。以下50と同様。平安時代前期。

均整唐草文軒平瓦（56） 顎部凸面をヨコケズリ、裏面オサ工後ナデ、平瓦部凸面オサ工。瓦当部凹面、平瓦部凹面に布目を施す。焼成は良好で硬質。『平安京古瓦図録』472（豊楽院出土）と同文。他には法勝寺、内裏跡、民部省などに出土例がある。平安時代中期。

均整唐草文軒平瓦（57） 顎部は欠損し、全体に磨滅している。平瓦部凹面にきめ細かい布目を

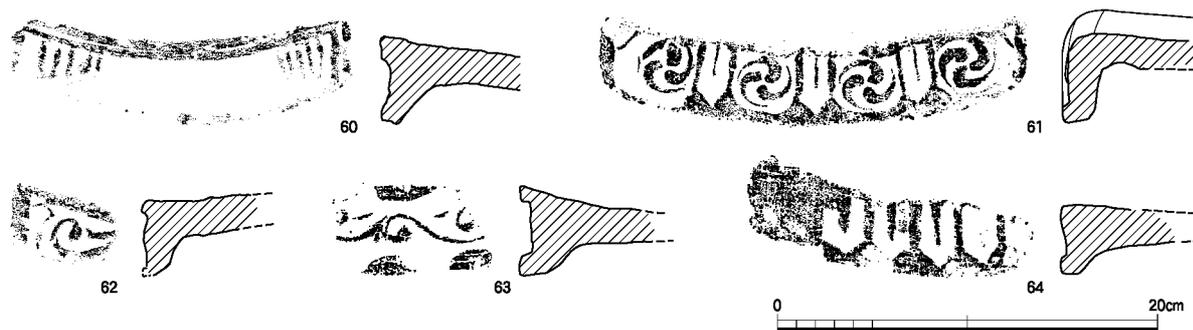


図19 B区出土軒瓦(1:4) B区SE23:60~62、SD18:63、SD25:64

施す。焼成ほぼ良好で硬質に近い。『木村捷三郎収集瓦図録』211、587と同文。小野瓦窯産。平安時代中期。

均整唐草文軒平瓦(58) 顎部凸面ヨコケズリ、裏面オサエ、平瓦部凸面タテケズリ。瓦当部凹面ヨコナデ、平瓦部凹面布目を施す。焼成は良好で硬質。安井西裏瓦窯産。平安時代中期。

蓮弁文軒平瓦(60) 成形は折り曲げ技法。顎部凸面をヨコケズリ、裏面ヨコナデ、平瓦部凸面指ナデ。瓦当部凹面ヨコナデ、平瓦部凹面きめ細かい布目、側面タテケズリを施す。瓦当面中央は磨滅し、焼成不良で軟質。山城産(洛北)。平安時代後期。

巴文剣頭文軒平瓦(61) 瓦当成形は折り曲げ成形。顎凸面ヨコケズリ、裏面オサエ、平瓦部オサエ。瓦当部凹面布目、側面にタテケズリを施す。焼成は不良で軟質。『木村捷三郎収集瓦図録』

表2 遺物概要表

	時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
A区	平安時代 ~鎌倉時代	土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器・輸入陶磁器・焼締陶器・山茶碗・凝灰岩	11箱	土師器13点、須恵器1点、白色土器3点、白磁2点	10箱	0箱
		軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦	10箱	軒丸瓦2点、軒平瓦7点	8箱	0箱
	室町時代	土師器・須恵器・輸入陶磁器・焼締陶器・瓦器・国産施釉陶器	1箱	土師器5点、瓦器4点、施釉陶器1点、焼締陶器1点	1箱	0箱
		江戸時代以降	土師器・焼締陶器・国産施釉陶磁器	7箱		6箱
		金属製品	1箱		0箱	1箱
B区	平安時代	軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦	13箱	軒丸瓦1点、軒平瓦9点	11箱	0箱
	鎌倉時代	土師器・須恵器・輸入陶磁器・焼締陶器・山茶碗	1箱	土師器5点	1箱	0箱
	桃山時代	土師器・国産施釉陶器・焼締陶器・瓦器	2箱	土師器1点、施釉陶器8点、焼締陶器1点	2箱	0箱
	江戸時代以降	土師器・焼締陶器・国産施釉陶磁器	4箱		3箱	1箱
金属製品		1箱		0箱	1箱	
	合計		51箱	64点(5箱)	42箱	4箱

703～704（下鴨神社出土）と同文。山城産。平安時代後期。

唐草文軒平瓦（62） 瓦当成形は折り曲げ技法。顎部凸面磨滅、裏面ヨコナデ。平瓦部凸面縄目叩き。瓦当部凹面、平瓦部凹面磨滅が激しいが布目が一部に残存する。栗栖野産。平安時代後期。

唐草文軒平瓦（63） 瓦当部接合は包み込み式である。成形は折り曲げ技法。顎部凸面をヨコナデ、裏面ヨコナデ、平瓦部凸面ヨコナデ。瓦当部凹面、平瓦部凹面ヨコナデを施す。焼成は良好で硬質。播磨産。平安時代後期。

剣頭文軒平瓦（64） 瓦当成形は完全折り曲げ技法。顎部凸面をヨコケズリ、裏面オサエ。瓦当部、平瓦部凹面に布目を施す。瓦当部正面左端に范欠傷が認められる。焼成はややあまく軟質、山城産。平安時代後期。

## 5. ま と め

調査地は平安宮の東南隅にあたり、平安時代において調査地A区は、二条大路の北、大宮大路東の左京二条二坊に4町を占有した冷然院内の北西に位置し、北方には神祇官町、さらに北には東宮町などの諸司厨町が展開していた地域である。B区は平安宮内の神祇官北部に位置し、宮内省、大炊寮、雅楽寮などの官衙に囲まれた官庁街である。また中世に両地区は聚楽廻南辺を形成する地域でもあった。そして近世には二条城を中核として京都所司代屋敷などの江戸幕府の役所などが建てられており、この地域一帯は京都における幕府官庁街として機能していた場所であった。このような歴史変遷を裏付けるように、今回の調査は平安時代から中世、近世に渡る3時期の成果を得られた。以下に今回の調査のまとめを述べる。

### 近世

二条城の創建時から続く旧竹屋町通を2面（1面の昭和期を除く）にわたり検出し、またA区ではその南側溝に推定される溝を検出している。江戸時代から修築を繰り返しながら近代へとまたがる2時期の路面は、寛永期の後水尾天皇の行幸以来、上面に白砂を載せた丹念な整地がなされていたのを確認している。これは二条城とその周辺に幕府直轄の官庁街が置かれていた事などから京都における幕府の中心地として捉えていた事を窺わせることの一つであろう。

### 近世初頭から中世

A区で聚楽第、二条城以前の土取土壌を検出した。B区では桃山時代天正期の遺物を多く包含するSD25、それに交差する溝SD17、堀状遺構SD18を検出できた。この遺構群は聚楽第をとりまく聚楽廻関連の南辺地域と推定できる資料の一つとなり得るのではないだろうか。また鎌倉時代前期の井戸SE23も検出したが、それに伴う遺構群は検出できなかった。

### 平安時代

A区では平安時代前期の遺構として推定されるものを数基検出できた。後にそれらは、後期に削平を受け埋められて整地されているのを確認できた。その整地層には後期の遺物に混じり嵯峨天皇期の冷然院創建時の遺物等も細片ではあるが多く検出している。そしてその整地層の上面で

東部には後期の建物に伴うPit群が検出されている。しかし東西柱穴列以外は調査区の限界から、復元には至らなかった。

冷然院は三町から六町までの敷地をもつ歴代の後院として知られ、史料上の初見は、弘仁七年<sup>12)</sup>(816)の先に述べた嵯峨天皇の行幸にある。貞観十七年(875)に冷然院は大規模に焼失する。<sup>13)</sup>これが第一期冷然院にあたり、第二期にあたる冷然院が元慶四年(880)に再建されたとされるが<sup>14)</sup>天曆三年(949)失火により焼失する。<sup>15)</sup>後に名前を冷泉院と改め再建(第三期)されるが、その後も冷泉院は焼亡と再建を繰り返すことになる。その後、天喜三年(1055)に冷泉院は殿舎を壊し、一条院に移築されるなど<sup>16)</sup>衰退していく。出土遺物がこの時期にかかるものが多かったのも、冷泉院の衰退の流れを考える上で貴重な資料となろう。またそれ以後の12世紀中頃までの遺物も出土する事から11世紀中頃から12世紀中頃まで冷泉院は徐々に終焉を迎えていったと推定される。

B区は平安時代において神祇官の官衙内に位置し、桃山時代の遺構から平安時代前期の遺物が少量出土した。しかし平安時代の遺構は検出できなかった。この事からB区は神祇官内の空閑地であり、平安時代前期以降は中世まで内野化していた地域の一部とも推定できた。

以上、今回の調査においては3時期の成果を得られた。しかし調査地は面積も狭く冷然院、神祇官の限られた範囲の北端部を確認したにすぎなかった。今後さらなる冷然院、および聚落第廻り、二条城などの既往の周辺調査などを新たに検討するならば、この地の歴史変遷の全容が明らかになっていくものと考えられる。

#### 註

- 1) 上村和直・吉崎 伸「左京二条二坊(2)」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 2) 現地説明会資料 2002年
- 3) 関西文化財調査会
- 4) 田中利津子「平安宮宮内省跡」『京都市内遺跡発掘調査概報』平成13年度 京都市文化市民局 2002年
- 5) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 6) 『史料 京都の歴史 第9巻 中京区』平凡社 1985年
- 7) 弘仁七年八月二四日の条『新訂増補 国史大系「類聚国史」』吉川弘文館 1979年
- 8) 『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教育委員会 1996年
- 9) 京都市埋蔵文化財研究所編『木村捷三郎収集瓦図録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 10) 平安博物館編『平安京古瓦図録』雄山閣 1977年
- 11) 広田長三郎編『古瓦図考』ミネルヴァ書房 1989年
- 12) 7と同じ
- 13) 貞観十七年正月二八日の条『新訂増補 国史大系「日本三代実録」』吉川弘文館 1977年
- 14) 太田静六『寝殿造の研究』吉川弘文館 1987年
- 15) 天曆三年十一月十四日の条『新訂増補 国史大系「日本紀略」』吉川弘文館 1979年
- 16) 天喜三年六月七日の条『新訂増補 国史大系「百鍊抄」』吉川弘文館 1979年

# 圖 版

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	しせききゅうにじょうりきゅう(にじょうじょう)・へいあんきゅうじんぎかん・へいあんきょうれいぜいいんあと							
書名	史跡旧二条離宮(二条城)・平安宮神祇官・平安京冷然院跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2002-12							
編集者名	大立目 一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2002年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせききゅうにじょうりきゅう 史跡旧二条離宮 (にじょうじょう) (二条城) へいあんきゅうじんぎかんあと 平安宮神祇官跡 へいあんきょうれいぜいいんあと 平安京冷然院跡	きょうとしなかがざうく 京都市中京区 たけやまちどおりほりかわ 竹屋町通堀川 にしいるにじょうじょうちよう 西入二条城町	26100	A453	35度 00分 45秒	135度 45分 09秒	2002年7月 3日～2002 年9月18日	120㎡	公共下水道 埋設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡旧二条離宮 (二条城)	都城跡	江戸時代	路面・柵列	土師器・陶器・磁器・ 金属製品		2時期にわたる旧竹 屋町路面を検出。		
平安宮神祇官跡		桃山時代	溝・堀状遺構	土師器・陶器		聚楽廻南辺の堀状遺 構を検出。		
平安京冷然院跡		室町時代後期	土壇	土師器・須恵器・瓦器 ・陶器				
		鎌倉時代前期	井戸	土師器・須恵器・瓦器 ・陶器・輸入陶磁器				
	平安時代	柱穴	土師器・須恵器・緑釉 陶器・灰釉陶器・白色 土器・輸入陶磁器・軒 瓦		平安時代後期の柱穴 群を検出したことから 12世紀中頃まで冷 然院は存続していた 可能性があることを 確認。			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-12

史跡二条離宮(二条城)・  
平安宮神祇官・平安京冷然院跡

発行日 2002年10月31日

編集  
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 075-256-0961